学年通信

あごだし

令和８年１１月５日
１１月号
昭島市立清泉中学校３学年

11 月の行事予定

日	曜	行事
4	水	三者面談　期末考査1週間前
5	木	三者面談
6	金	常任委員会
7	土	
8	日	
9	月	安全指導　受験写真撮影
10	火	
11	水	期末考査1日目
12	木	期末考査2日目
13	金	期末考査3日目
14	土	
15	日	
16	月	全校朝礼
17	火	避難訓練
18	水	職員会議
19	木	
20	金	
21	土	
22	日	ESAT―J
23	月	勤労感謝の日
24	火	
25	水	仮内申発表　進路会議
26	木	⑤⑥カット　進路会議
27	金	
28	土	
29	日	
30	月	

11月の学習予定

国語：文法、論説文
数学：相似な図形
英語：関係代名詞、仮定法
社会：個人の尊重と日本国憲法
理科：運動とエネルギー
音楽：能楽
美術：自画像
技術：ロボットを動かす
家庭：消費生活
保体：器械運動

自分たちの手でつくり上げた、最高の合唱！

体育大会、修学旅行、そして合唱コンクール。3 年生にとって大きな行事が次々と幕を閉じました。今年度、学年として大切にしてきたことがあります。それは、「自分たちで行事を盛り上げるために、何ができるか」ということです。体育大会では各クラスが団結し、修学旅行では学年全体で最高の時間をつくり、そして合唱コンクールでは、それぞれのクラスが自分たちのカラーを存分に発揮してくれました。もちろん、すべてが順調だったわけではありません。ときには意見がぶつかり合い、熱くなることもありました。しかし、それも「もっといいものを作りたい」という思いがあったからこそだと思います。放課後に残ってグッズを作るクラスもあれば、一人一人が役割を分担し、家庭で準備を進めるクラスもありました。目標やカウントダウンを掲示したり、練習で気を付けることをホワイトボードに書き出したりと、取り組み方は実にさまざまです。限られた時間の中で、自分たちにできることを考え、工夫しながら行事を盛り上げてきました。そして、そこには担任の先生たちの熱い思いもありました。少しでもいい合唱にしたい。その思いは先生たちも同じです。生徒も先生も本気で向き合い、試行錯誤を重ねてきました。本番では、どのクラスも素晴らしい歌声を披露してくれました。仲間とともに日々積み重ねてきた練習の成果が歌声から伝わり、曲の表現や、声の響きの中に、各クラスの個性が光る、忘れられない合唱コンクールとなりました。

学年合唱「河口」は、非常に難しい曲でした。そのため、練習を始めた最初の 1 週間は、クラスの垣根を越えてパートごとに集まり、練習を行いました。その中心となったのは、パートリーダーの人たちです。仲間をまとめ、一つの合唱を作り上げるために練習を進めてくれました。各クラスでは、それぞれのカラーを出しながら最高の合唱を目指す。一方、学年合唱ではクラスの枠を越えて力を合わせる。競い合うときは本気で競い、力を合わせるときは学年一丸になる。そんな姿に、3年生の成長を感じました。卒業式では、さらに成長した「河口」を届けられるでしょう。

行事を盛り上げるのは、誰か一人ではありません。一人一人が自分にできることを考え、行動する。その積み重ねがクラスを、そして学年を動かしていきます。体育大会、修学旅行、合唱コンクールを通して、みんなは本当に大きく成長しました。行事を盛り上げるために自分たちで考え、行動し、ときにはぶつかり合いながらも、最高のものを目指してきた。その一つ一つの積み重ねが、今回の素晴らしい合唱につながったのだと思います。

どのクラスも本当に素晴らしかった！みんなの頑張りを心から誇りに思います。最高の合唱コンクールをありがとう！

合唱コンクールの様子

写真

代表生徒の作文

写真

「クラスで迎えた最高のフィナーレ」　2組　●●　●●

「さようなら」というクラスの号令とともに、中学校最後の合唱コンクールが終わりを迎えた。思い返してみると、この合唱コンまでの三か月くらいで様々な出来事があった。最初の放課後練習、私のクラスは音楽室で練習した。まだ練習を始めたばかりで、歌は正直言ってめちゃくちゃだった。だけど、この時、なぜか歌っていて、涙が出てきそうになった。それは、一人一人が一生懸命歌っていたからだと思う。私は歌うことが特別好きではなかったが、この時、みんなで歌うことが本当に楽しいと感じた。練習を始めた頃は、音程やリズムが曖昧だったり、話し声がとびかったりして、練習が上手く進まないことがあった。しかし、練習を重ねるうちに、金賞という目標に向かってクラス全体が一つになっていった。私は実行委員とて、クラスをまとめたり、合唱がより良くなるようにアドバイスを送ったり、そしてなりより、大きな声で一生懸命歌うことを頑張った。大変なことも多かったが、みんながそれぞれの役割を果たして努力する姿を見て、自分も頑張ろうと思えた。そして、クラスの自由曲である「ひとつの朝」への愛着が深まり、学校生活の中でみんながロずさんでいるのを聞くと、とても嬉しかった。本番当日、これまで以上に頑張って練習してきたからこそ、去年や一昨年では感じられなかった緊張感が朝からこみ上げてきた。懐かしい気持ちで、一、二年生の発表を聴いているうちに、あっという間に午後になり、三年生の部が始まった。三番目に二組の出番が来ると、緊張しながら舞台に上がった。これまでもらったアドバイスやみんなで思い描いた曲の情景を心に浮かべながら、悔いのないように最後まで力を出し歌いきった。三年生の部が終わると、クラスメイトに「お疲れ様」「ありがとう」などと声をかけにいった。みんなも互いに声をかけあい、顔には笑顔が浮かんでいた。そして、結果発表で二組が金賞をとったと分かった瞬間、嬉しさのあまり思わず叫んでしまった。近くにいたクラスメイトと喜びを分かち合いながら、これまでの練習の日々が思い出された。実行委員として大変なこともあったが、最後まで頑張ってきて本当に良かったと思った。最後の最後にとびっきりの笑顔で終わり、頑張ってきてよかったなと思えた。これこそが最高のフィナーレだと思った。

写真

「私たちらしさ」　5組 ●● ●●

「やっぱり5組だな。」舞台の上、スポットライトの眩しさの中で歌っている最中、私は心の中で思わず笑ってしまった。男子のパートが入る瞬間、タイミングがズレたのだ。普段の練習なら、「お前ふざけんなよー。」と言い合いが起こるかもしれない。けれど、本番のあの緊張感の中で起きた小さなズレは、どこか安心感があって、いかにも不器用で真っ直ぐな5組らしさがあった。合唱コンクール前日は、朝から冷たい雨が降っていた。本番を翌日に控えているというのに、クラスの雰囲気はどこか不安定で、まとまりきっていない焦りが教室に漂っていた。パートごとの声のバランスも上手くいかず、誰もが不安を抱えたまま前日の練習を終えたのだった。そして迎えた当日。空は雨こそ上がっていたものの、どんよりとした曇り空だった。すっきりしない天気を映したかのように、私たちの心にもすこしの不安と緊張が居座っていた。けれど、舞台に立ち、指揮者が手を挙げた瞬間、空気は一変した。イントロが流れ、声を出した瞬間から、これまでで一番の集中力がクラス全体を包み込んだ。前日の不安を打ち消すように、一人一人が全力で声を響かせる。途中で起きた男子のちょっとしたズレも、私たちにとっては失敗ではなく、これまでも練習の日々を象徴するような、私たちだけの証のように思えた。最後の音がホールの天井に消えていき、指揮者の手がゆっくりと下りたとき、胸の奥からこみ上げてきたのは、これまでに味わったことのない大きな「達成感」だった。上手く歌えたかどうかよりも、このメンバーで最後まで歌いきったという満足感で胸がいっぱいになった。やりきった、最高の合唱だったと思った。しかし、結果発表の時間、現実は甘くなかった。事前の評判や手応えから、銀賞はいけるだろうと予想していた。けれど、放たれたアナウンスは銅賞。予想もしなかった結果に頭が真っ白になった。ステージ上での達成感が大きかった分、突きつけられた現実はあまりにも悲しかった。どうして届かなかったんだろう、もっとできたことはなかったのか、と心が揺れた。けれど、時間が経つにつれて、あの悔しさも含めて、私たちの合唱コンクールだったと思う。前日の雨も当日の曇りも男子のズレも、そして銅賞という結果も、すべてが5組だけの特別な思い出だ。賞の形はどうであれ、舞台の上で全員の心が一つになったあの瞬間の輝きと、胸に満ちた達成感だけは、誰にも奪えない宝物だ。この悔しさと達成感を胸に、私たちは卒業へ向けて次の歩みを進めていく。

写真

「同床異夢から志同道合へ」　1組 ●● ●●

ホールに響く歌声。真剣な表情で指揮者を見つめる目。同じ目標をもつライバルたちの姿。私たちの発表が始まったその瞬間、これまでの練習の日々が頭をよぎる。一組の合唱練習は、決して順調だったわけではない。私は三年間、実行委員を務めた。学年が上がるにつれ責任が大きくなり、大好きな一組のためにも、クラスを金賞へ導きたいという思いが強かった。そしてクラスのみんなもその思いに応えてくれていた。しかし、本番が近づくにつれて、練習を重ねるごとに互いの思いがすれ違ってしまうこともあった。クラスをまとめることの難しさに悩み、思うようにいかないことにもどかしさを感じた。そんな私たちが変わるきっかけとなったのは、互いの思いと向き合ったことだった。先生の厳しい言葉を受け、悔しさから涙があふれたこともあった。しかし、その出来事をきっかけに、クラス全体の空気が変わり始めた。一人一人の表情が引き締まり、歌声にも熱がこもるようになった。クラスみんなの気持ちが一つになったのを感じた。本番、ホールに響き渡る「地球の鼓動」。これまでの衝突も、悔しさも、積み重ねてきた努力…すべてが一つの曲につながった。結果は銀賞。クラスを金賞に導くことのできなかった悔しさが大きくあったが、その時の自分は「みんなで歌い切ることができた。私たちの鼓動を聞かせられた。」という喜びの思いの方が大きかった。悲しいことも、うれしいことも、つらいことも沢山あった合唱コンクールだった。しかし、このコンクールを通して一組は卒業に向けて大きな成長をすることができたと思う。そして何よりも一組のみんなと「地球の鼓動」を響かせられたことが、私の誇りである。

写真

「あなたへ」向けた最高のハーモニー　3組 ●● ●●

「あなたにとっての『あなた』って誰？」本番が近づいてきたある日、先生から投げられた問いに、私はすぐに答えることができなかった。私は今回の合唱コンクールで指揮者という新たな挑戦をした。私たちが選んだ自由曲は「あなたへ」。しかし、本番までの道のりは決して楽なものではなかった。学級委員として、指揮者として、抱えるものは大きく、悩んだこともあった。私は、三組の大きな分岐点だったと思う日がある。それは一日目のリハーサルだ。その日まで放課後練習などにあまり本気ではないと感じていた。初めて他クラスの前で歌った時、良い合唱だったとは全く言えないような歌と態度だった。リハーサルが終わり、教室に戻った。やはりクラスの雰囲気はとても暗かった。しかし、実行委員をはじめとして、全員が休み時間を削り、話し合いをした。それにより、クラスの団結力がよりいっそう高まった。練習中では、関係のないことではなく、合唱に対する話が多く聞こえるようになり、とても嬉しかった。その後も各パートやクラスで協力し、練習を重ね、困難を乗り越えた。そして迎えた合唱コンクール当日。三年生の中のトップバッターとして舞台に立った。全校生徒の視線が突き刺さるような緊張感だった。課題曲「河口」が終わり、自由曲「あなたへ」を歌う時が来た。指揮台に立ち、みんなを見た。そこにいたのは今までにないほどの本気な仲間たちだった。曲が終わった後、込み上げてきたのは強い達成感だった。結果が発表された瞬間、指揮者としてみんなを金賞に導くことができなかった悔しさがあった。しかし、クラスの誰ひとりとして泣いている人はいなかった。それがみんなの全力だったことの証明だと感じた。そんなみんなを見て、先生からの問いの答えを見つけた。私にとっての「あなた」は、ここまで一緒に頑張ってきたクラスの一人一人だ。「あなたへ」を通して見つけた仲間という大切な存在。それは私の心に刻まれた最高の宝物だ。

写真

「このクラスだからこそ」　4組 ●● ●●

「合唱コンクール」と聞いて、みなさんは何を思い浮かべますか。きれいな歌声、クラスの団結、賞を取れた喜び。私にとって今年の合唱コンクールは、それだけでは伝えきれないほど、たくさんの思いが詰まったものになりました。四組は、他のクラスと比べて落ち着いていて、静かなイメージのあるクラスです。練習が始まり最初の学年練習を迎えたとき、私たちの歌声は他のクラスに比べて小さく、周りの人や担任の先生にも厳しい意見をたくさんもらいました。クラスの中では、それぞれの思いがぶつかり、話し合いをしたことで逆にすれ違ってしまい、みんなで頑張りたいという思いがあるはずなのに、それぞれの思いが伝わらずクラスの雰囲気は次第に悪くなってしまいました。初めて実行委員を務めた私は、分からないことだらけでクラスをまとめることもうまくできませんでした。そんなとき、支えてくれたのはクラスの仲間だけではなく、学年の先生も私たちにたくさんの言葉をくれました。うまくいかないことばかりだった時にその前向きな「実行委員が諦めたらクラスもついてきてくれないよ！」という言葉で、もう一度頑張ろうという気持ちに変わっていきました。そんな四組の気持ちを変えるきっかけになったのが、学級委員がみんなの前で話してくれた言葉でした。うまく伝えたりまとめたりすることが苦手な私にとっても、みんなにとってもまた一緒に頑張ろうと思えるくらい響く言葉だったと思います。また、最初からみんなを引っ張ってくれた人や放課後毎日練習を続けてくれた人もいました。私が目指していたことは、周りよりうまく歌えることや褒められることだけではなく、中学校最後の合唱コンクールを、クラスみんなで「やりきった！」と思えることでした。そして迎えた本番では、賞とることはできませんでした。でも私は実行委員として最後までやりきり、何よりも今までで一番良い合唱にできたと胸を張って言えます。中学校生活もあと少しになってしまったけれど、今回の合唱コンで学んだ諦めないことや仲間の大切さをこれからの学校生活でも大切にしていきたいです。